

「早く和解しなさい」

マタイによる福音書 6:21-26

8月に入って2週目に入りました。「8月は、6日・9日・15日」とよく言われますように、広島に原子爆弾が落とされた6日と長崎に2発目の原爆が落とされた9日、そして日本が戦争に負けて第二次大戦の終わった15日と、私たちが忘れてはならない日々が続きます。戦後76年になり、戦争を知らない世代が多くなりましたが、あの悲惨な戦争と戦争によって犯した過ちを、私たちは決して風化させてはなりません。

そういう意味で、先週からこの8月一杯、マタイによる福音書の5章から7章にかけてのイエスさまの「山上の説教」から、本当の平和とは何か、またどうしたら平和を生み出すことができるのか、ということをご一緒に学ぶことにいたしました。

先週は、5章13節-16節を通して、「地の塩」「世の光」としての教会の使命、この世に対する役割について学びました。日本基督教団の「戦責告白」は、「『世の光』『地の塩』である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした」という文言で、「あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めた」ことを懺悔告白しています。

教会は、この世にあって、ほんとうに小さな存在ですが、イエスさまの恵みによって、「世の光」としての、また「地の塩」としての大切な使命と責任を与えられているのです。それは、この世、この地上に、和解と平和を造り出す役割です。

この5章の13節には、「平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子とよばれる」とあります。平和を実現させるためにこそ、神さまは私たちをこの世から選び分かち、「神の子」としてくださったのです。しかし、「平和を実現する」ということは、どういうことでしょうか。「平和」とは、ヘブライ語で「シャローム」という言葉です。これは単に戦争がないという状態だけを意味する言葉ではありません。もちろん、戦争のない状態は、平和の一つの大切な要素ですが、聖書においては、何よりも、神さまとの関係において平和を得ているということが、平和の基なのです。

イエスさまの時代、パレスチナの地方は、ローマ帝国の支配下において、一応の平和が保たれていました。いわゆる「ローマの平和」(パクスロマーナ)と呼ばれたものです。それは、ローマの巨大な軍事力のもとに保たれた「平和」でしたが、その支配下にあった国々においては、高い税金を支払わされ、徴兵や強制労働など様々な制約を受けていました。今、日本の国もアメリカの軍事力と「核の傘」のもとで、一見「平和」が保たれているように見えますが、沖縄の人たちの犠牲や地位協定などに見られる様々な制約、また将来に対する不安を思うと、単純に「平和」と言えるかどうか疑問です。

イエスさまは「剣をとる者は皆、剣によって滅びる」(マタイ 6:52)とされました。軍事力や核の力によって、平和は維持されないどころか、むしろ滅びを招く恐れがあるのです。預言者イザヤは、神がもたらす平和として、「剣を打ち直して鋤(すき)とし、槍を打ち直して鎌(かま)とする」(イザヤ 2:4)という幻を描いています。剣や槍という戦いで人を殺すための武器を、畑を耕し農作物を实らせるための鋤や鎌に打ち直し、「もはや戦うことを学ばない」ことこそ「平和」だと言うのです。

戦争は、人と人が武器をもって殺し合うことです。あの第二次大戦下における我

が国の戦争犠牲者は 310 万人、内 100 万人が民間人だそうです。アジアの犠牲者は 2,000 万人ということです。こんなに多くの人の命が犠牲になったのです。将来、もしも核兵器が使われることになったら、勝者も敗者もなく、人類は絶滅し、地球そのものが破壊されることになるでしょう。そういう中で、私たちは、聖書の教える「平和」の意義と尊さを改めて、深く学ぶ必要があるように思います。

聖書が一貫して私たちに教えていることは、「命の尊さ」ということです。モーセの十戒の中にも「殺してはならない」という戒めがあります。この戒めを基に、例えば、民数記など律法の書には「人を殺した者については、必ず複数の証人の証言を得たうえで、その殺害者を処刑しなければならない」(民数記 35:30)など、細かな規定が定められ、「命には命をもって償わなければならない」という厳しい掟が設けられています。

「人を殺す」ということは、確かにあってはならないことです。どんなに小さな命も、失われてはならない大切なものです。

「人を殺してはならない」ということを、私たちはある意味で、当然のように思っていますが、なぜ人を殺害することが、いけないことなのかということについては、あまり考えてはいないのではないかと、思います。

今から 24,5 年ほど前のことになりますが、神戸で「連続児童殺傷事件」というのがありました。サカキバラと名乗る 14 歳の中学生が、無差別に 2 人の小学生を実に無残な殺し方で殺害し、3 人の小学生をも殺す目的で傷つけたという、世の中を震撼させた出来事です。この事件の異常さは、殺すことに快感を覚え、犯行後取り調べに対して、「人が人を殺すことがなぜ悪いのか」と、問うたことでした。当時この問いに対して、マスコミは「驚いた」という反応は示したものの、誰もこの問いに対して答えようとしませんでした。「なぜ人が人を殺して悪いのか」。世の知識人も答えられなかったのです。この問いに対する答えは、聖書からしか出てこないのです。

聖書が「人を殺すな」というのは、単に人道的な立場からではありません。人の命は神からのものであるからです。創世記によると、人は神によって、神のかたちに造られ、命の息を吹き込まれ、神によって生かされている存在であるということが示されています。自分の命も、人の命も神さまからの尊い贈り物なのです。だれもこれを傷つけたり、奪ったりすることは出来ないのです。どの人も、どの人も、神さまから必要とされて生かされているのです。そこに何者によっても犯されてはならない人間の命の尊厳があるのです。

それは、人を殺さなければ、それでよいということではありません。当時の多くのユダヤ人たちは、「人殺し」をしていないということで、この戒めは、自分とは関係のない戒めだ、と信じていたことでしょう。しかし、イエスさまは言われました。

「あなたがたも聞いている通り、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者。兄弟に『ばか』という者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』という者は、火の地獄に投げ込まれる」(21-22 節)。これは、実に驚くべき言葉です。イエスさまは、旧約の戒めを根本から問い直し、その本来の意図から、対人関係の在り方を指摘しているのです。

ここで言う「兄弟」とは、単に血のつながりのある兄弟・姉妹という意味ではありません

せん。親しい者や、仲間という意味だけでもありません。神さまによって愛され、受け入れられ者はすべて兄弟姉妹なのです。つまり、「人を殺すな」という神さまの戒めは、「すべての人の命を重んじ、その人格を傷つけてはならない」という戒めなのだ、とイエスさまは受け止め、諭されたのです。

人に対して「腹を立てる」、「怒る」ということは日常的によくあることです。相手が理不尽なことを行ったり、失礼なことを言ったり、プライドを傷つけられたりしたような時、怒るのは人間の自然な感情です。不正や不義に対して、怒るということは、大切なことでもあります。しかし、その怒りが相手に対する敵意や憎しみを伴う時、その怒りによって、自らが裁きを受ける結果になるのです。大切なことは、その怒りが、神さまの前に正しい怒りであるかどうか、ということです。

パウロは「怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはなりません。悪魔にすきを与えてはなりません」(エフェソ 4:26)と述べています。怒ることそのこと自体が悪いわけではありません。「怒りを長引かせたりすることによって、それが相手に対する憎しみに代わったり、敵意になったりすることを警戒せよ」と、怒りによってサタンにスキを与えるなど警告するのです。

私にも経験がありますが、腹を立てたり、怒る時、冷静さを失ってしまうのです。そして、自分を見失い、自分が絶対に正しく、相手が絶対に間違っていると思い込んでしまうのです。これでは対話は成り立ちませんし、相手の立場を理解することはできません。誤解したまま喧嘩別れになってしまうようなことがあるのです。私の友人で「瞬間湯沸かし器」とあだ名を付けられていた人がおりました。すぐに熱くなってかっかとするものですから、人を誤解したり、人から誤解されたりして、人間関係で苦労しているようです。人間には怒りを正しくコントロールするというのが必要なのです。

人に腹を立てた時、つい口から出てくる言葉が「バカ」とか「愚か者」という言葉です。これはどちらも人を貶す(けなす)言葉です。子どもたちが喧嘩しているのを側で聞いていると、まあよくもこんなに人をけなす言葉があるものだと思うほどに、ひどい言葉が次々と出てくるものです。そういう相手を馬鹿にした言葉は、言っている本人は、それほど深い意味がなくても、相手にとっては傷つき、いじめやハラスメントになることがあるものです。中傷や誹謗の言葉が、自分の存在を否定されたように受け取られることがあるからです。韓国・朝鮮の人々に対する心無いヘイトスピーチや、中国を敵視し必要以上に敵対感情を盛り上げようとする政府やマスコミの傾向は、危険だと思います。少なくとも、「敵をも愛せよ」と言われるイエスさまの教えに逆行するものです。イエスさまは、「殺すな」という戒めを、単に「殺人」を戒めた掟としてだけ理解し、自分とは関係がないと思っている人々に対して、あなた方はどれだけ、あなたの隣人を、神さまから愛され受け入れられている人として重んじ、「自分を愛するように隣人を愛しているか」と問うているのです。愛さないことは、殺すことだと。

イエスさまは、ここでさらに、二つの例をあげておられます。一つの例は、祭壇に献げ物をする場合のことです。「兄弟が自分に反感を持っているのを思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから、供え物を献げなさい」というのです。 またもう一つの例は、人から訴えられて裁判の席に行くと

き、「その途中で、早く和解しなさい」というのです。これは、どちらも、相手から嫌われたり、相手から訴えられたような場合のことです。私たちは、自分から相手を傷つけるようなこともあるのですが、相手から憎まれ、嫌われ訴えられるという場合もあるのです。たとえそういう場合でも、自分の方から、進んで和解し、早く仲直りしなさい、というのです。「まず行って兄弟と仲直りする」こと、「早く和解すること」このことが、共に平和に生きて行くために大切なことだということです。互いに和解し平和を造り出すということは、自分の立場やメンツを先に立てることではなく、自分から進んで相手を受け入れることだということです。戦争のない、平和な世界を造り出すということは、結局私たち一人一人が、互いに赦し合い、受け入れ合い、愛し合って「共に生きる」ことから始めなければならないということです。

イエスさまがこの世に来られたのは、人と人との間に立ちはだかる憎しみと敵意という「隔ての中垣を取り払い」、私たちが共に神の家族として愛し合い、一つになるために他なりません。主イエスは、そのために自ら進んで十字架の道を進まれ、尊い命を捧げられたのです。イエスさまは、ご自分の命を懸けて、「殺すなかれ」という戒めを完成され、私たちに、和解と平和への道を歩むことを求められたのです。 アーメン